

アドバイザー 公認会計士
香川 晋平氏
Shinpei Kajiwara

「数字に強い」社員を目指す！

数字に強い人とそうでない人。

会社にとって必要なのは、「数字に強い」人材だそうだ。
基本的な会計知識を身に付け、その知識を生かして
自分の仕事を「会社の利益」につなげることができる……。

今回は、公認会計士の香川晋平氏に
「数字に強い」社員になるためのポイントを伺った。

**自分に課せられた仕事が
会社の利益にどうつながるのか**

社会人であれば「数字」を意識しながら仕事をするのは、基本と言われている。しかし、実際には数字に興味がない社会人も少なくない。その見分け方はあるのだろうか？

「数字に強くない社員は、日常の会話からも簡単に見分けることができます。例えば、会話の中に「かなり」や「少し」を連発する人。「かなり増えています」とか「少し減っています」といった表現を多用する人は、

感覚的な発言が多く、話に具体性がないのが特徴です」

一方、「数字に強い」人は、「今月の目標売上達成まであと50万円です」などと、会話の中に具体的な数字がよく出てくる。

「それだけではなく、自分に課せられた仕事が会社の利益にどうつながるのか、常に意識しながら、利益貢献の度合いを自ら計算しています。ゲーム感覚で数字を意識している人も多いですね。上司から『この新商品の年間売上目標は3億円だ』と言

われたら、『営業マンが6人だから、1人当たり年間5000万円』『年間5000万円だと月に400万円以上』『商品単価が1000円だから月に4000個以上の売上』『さて、4000個売るにはどうすればいいか？』などと、大きな数字も身近な数字に置き換えて、ゲームを攻めることができます」

「時間を見直すこと」は「イコール「経費削減」になる

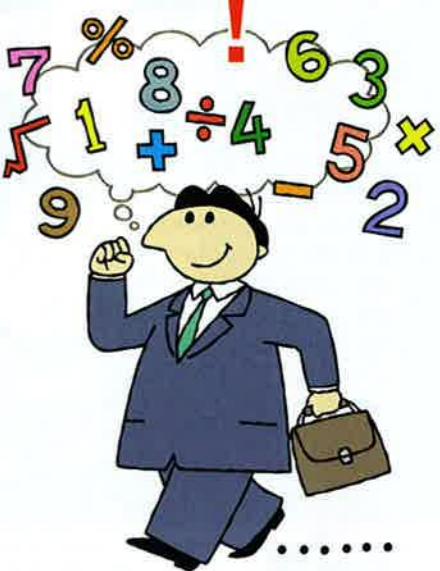
数字に強くない人は、そもそもなぜ会社から給与がもらえるのか、理解していない場合も多いそうだ。そういう人に限って「給料が安い」「処遇に不満がある」などと愚痴をこぼすのだ。

数字に強くない人は、そもそもなぜ会社から給与がもらえるのか、理解していない場合も多いそうだ。そういう人に限って「給料が安い」「処遇に不満がある」などと愚痴をこぼすのだ。

「そんなことはありません。会社の利益を増やすには、売上を上げる

また、営業職には売上という具体的な目標があるが、そのほかの管理部門や開発、製造に携わっている人は数字に置き換えるのが難しいと思うかもしれない。

数字に興味を持ち、数字に対する意識をちょっとでも変えていくと、自分と行動にもつながっていく。「会社の利益」について理解し、「自分は会社の利益に貢献しているのだろうか？」まずはそんなことを意識して行動してみてはどうだろうか。



あなたは「数字に強い

or 弱い」社員？

- 「かなり」や「少し」といった言葉をよく使う
- 自分の給与なら「会社にいくらの利益貢献が必要か」知らない
- 自社の「ビジネスモデル」を答えられない
- 根拠はないが、自分の会社は潰れないと思う
- 会社の利益を上げる方法を10個言えない
- 会議で自ら発言することはほとんどない

*チェックが3つ以下なら「数字に強い社員」
4つ以上なら「数字に弱い社員」です。



か、経費を下げるか。管理部門でも経費を削減させる方法を提案できましたし、製造部門なら、時間を意識すること』イコール「経費削減」になります。今まで1時間かかる作業を、50分に短縮させるにはどうすればいいだろ？そのため、例えれば生産ラインに新型機械を導入したら

どうか？その購入の費用対効果はどうのくらいか？あるいは無駄を省いて人件費を下げられないか……。そのような意識で日々の仕事に従事すれば、自分の仕事を「会社の利益につなげることができるはずです」

大きな数字も身近な数字に置き換えて、ゲームを攻略する感覚で仕事を進めてみる！

どうすれば手待ち時間を削減できるか？

あなたは、自分の1時間当たりの給与を考えたことがあるだろうか。25万円の給与をもらっている人なら、

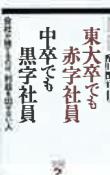
1日8時間勤務、1ヶ月20日間出勤するとして、1時間当たり約1600円の計算になる。

「その人が、何かの作業を待つていて手を休めている『手待ち時間』

「管理や開発部門で、8人の社員

が集まって1時間の会議をしたとします。この会議のコストはいくらだと思いますか？会計的な視点で考えると、従業員1日分の給与と同じ。会議がそれと同じだけの価値を生み出しているのでしょうか？それは思えないケースも多いはずです。ならば、会議に臨む前にテーマや決まり明確にすることで、時間短縮を図ればいい……。時間当たりの生産性は常に意識したいポイントで

オススメの一冊



今月の
アドバイザー

香川 晋平氏 (公認会計士)

「歴史」と「会社での評価」には、まったく関連性がない。「ある意識」を身に付けていれば、会社から評価され、高学歴社員を超える力を持つことができる。それは、「会社の利益に貢献する」という意識だ。では、どうやってその意識を身に付ければいいのか。「数字に強い」社員になるためのノウハウが一杯詰め込まれている。